

えにわ夏のミュージカル 2010

★星に祈りを

8月14日と15日、市民ミュージカルが上演された。タイトルは「星に祈りを」。3年目を迎えた今年も、家族愛をテーマにした手づくり作品だ。出演者はもとより、演出、音楽、効果、衣装、イラストも“恵庭産”。その舞台にかける情熱を追ってみた。

8月12日19時、市民会館大ホール。えにわ夏のミュージカル「星に祈りを」の舞台げいこが始まった。二日後の上演に向けての最終調整。出演者は、真剣な表情で出番を確認していく。市民ミュージカルは、08年の「オービータウンは大騒ぎ」、09年の「くれないの翼」に続き、今年で3年目。市内の演劇制作集団「サンデー・プレイ・プロジェクト」が主催して今回が2作目となる。恵み野西の任泰峰（じんたいほう）さんが脚本と演出を担当。出演者も、小学4年生から70歳代までと幅広い年齢構成だ。

8月14日18時、大ホールに本番開始を告げるブザーが響き、ゆっくりと緞帳が上がる。さあ、ミュージカルの始まりだ。

東京大田区にある、金属部品加工の小さなまち工場が舞台。工場を営む両親と5人姉妹、そして祖母の3世代8人家族を

取り巻く人間模様が描かれていく。現代社会の問題点でもある、親子の関係や児童虐待、子育てや非行などを真剣に、そして時には笑いを交え、物語は進んだ。

ある日、父の工場にNASA（NASA）（アメリカ航空宇宙局）から、依頼が入る。「金星に向かうロケットの、金属部品の一つを作ってほしい」と。製作期限は翌朝まで。しかし、父は直前



▲舞台でのリハーサルで、子どもたちに演技指導中。右下が、脚本・演出を手がけた任さん。





の乱闘騒ぎで右腕を負傷していた。そこで白羽の矢を立てたのが、学校から落ちこぼれ、この工場で働いていた若き工員。父の指導のもと、若者は徹夜で作業に励む。果たして間に合うのか。この若き工員に、密かに恋心を抱く次女は、完成をひたすら星に祈るのだった。そして、物語はクライマックスへー。

♪ アーア 生きていることが
こんなに幸せに満たされているとは
アーア 一つ一つの出来事が

すべて喜びに感じられる ♪

ミュージカルの最後、出演者全員で歌った「夜明け」の歌詞の一部だ。物語を通し訴えていた「幸せ」や「喜び」が、この歌に込められていた。つらい事も、貧しさも、家族のきずなで乗り越えていく。今の社会に欠けている「何か」をこのミュージカルは教えてくれた。

ロケットの部品は、無事完成し納品できた。物語には描かれなかったが、次女の初恋もおそらく…。こうして、ミュージカルと、そこに参加したみんなの夏は、二日間の上演とともに終わった。そして、それぞれ学校や仕事という日常生活に戻っていった。でも、来年に向け、きっと彼らはまた走り出すことだろう。新たな「熱い夏」を迎えるために。



▲芝居や歌だけでなく、複雑な踊りや激しい動きも完璧にこなし披露した。

